『スラヴ文化研究』Vol.20（2022）pp.54-79

日露戦争期の雑誌にみる両国の相互イメージとその変遷：『太陽』『ニーヴァ（Нива）』誌面比較の試み [1]

松枝佳奈

はじめに

日露戦争終結から 115 年以上が経過した。この戦争は、日本とロシアの双方に甚大な被害を与え、両国の社会を揺り動かした最初の大きな衝突であり、かつ国境確定問題をはじめとする今日の両国関係にまで少なからぬ影響をもたらしている。その一方で、この衝突は日露にとって最初の国民規模の「交流」であったとも捉えることができるだろう。日露戦争に参加した軍人の数は日本側が 108 万人を超え、ロシア側も 129 万人を超える規模に達し、[2] 戦闘という形ではあるが、多数の日本人とロシア人が実際に対面した。戦場から離れた地域に暮らす知識人や大衆も、当時急速に発達した雑誌や新聞などに掲載される記事や挿絵、写真を通じて、交戦国に関するさまざまな情報を手に入れていた。

戦時になると、必然的に戦況報告や交戦国にかかわる情報、論説が増える。知識人や大衆が交戦国への関心を高めることで、その国の政治や外交、軍事のみならず、文学や芸術、文化、風俗などもより多く報じられるようになると考えられる。戦場にいる兵士たちだけでなく、戦線から隔てられた人々もそのような報道や紹介をたよりに、交戦国やそこに住む人々のイメージを形成しながら間接的に「交流」するのである。対外関係における文化的・心理的・感情的な側面を明らかにすることは、軍事的・経済的な側面の場合ほど容易ではないが、それは異文化を理解するための鍵となる。[3] これは日露戦争期にも当てはまるだろう。当時の両国の相互理解の実態を詳らかにするためには、当時の戦況や両国の政治・経済問題およびその報道に注目するのみならず、文化面や心理・感情的側面、それらの報道や表象を明らかにすることも重要である。

本論文は、このような観点に立って近代日本の月刊総合雑誌『太陽』および帝政ロシアの週刊絵入り雑誌『ニーヴァ（Нива）』の日露戦争期における言説や表象を考察する。[4] 後

---

[1] 本論文は、JSPS 科学研究費（若手研究）JP21K12969 の助成を受けた。なお本論文には、筆者が 2010 年 1 月に東京外国語大学に提出した卒業論文「空想と現実のコラージュ：日露戦争期のロシア大衆雑誌に描かれた日本および日本人」の一部を大幅に加筆修正した内容が含まれる。

[2] 横手慎二『日露戦争史』中公新書、2005 年、199 頁。

[3] Akira Iriye, *Across the Pacific: An Inner History of American-East Asian Relations* (New York: Harcourt Brace & World Inc. 1967), p. 328.

[4] 1918 年までロシアではユリウス暦が採用されたため、『ニーヴァ』各号の日付はユリウス暦に基づく表記である。以下、本論文中の『ニーヴァ』発行年月日の表記は原則としてユリウス暦に基づき、

松枝佳奈：九州大学大学院比較社会文化研究院・講師

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https:creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

述するが、両誌とも毎号さまざまなジャンルの記事や、豊富なイラスト・写真を掲載し、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて多数の読者を集め、当時の両国の出版文化を代表する雑誌であったといえよう。両誌の分析を通して、以下の二点から当時の日露の「交流」や理解の様相と変容の一端を探っていく。

第一に、日露戦争期に両国の知識人や大衆は、いかなるイメージを持って敵としてのロシアおよびロシア人、あるいは日本および日本人を理解したのか。つまり日露相互の «массовое сознание»（集団意識）の一端を探る。この「集団意識」とは、様々なイメージや、ステレオタイプや先入観が蓄積してできた複合体によって決められ、個人を支配する価値体系である。[5] 第二に、双方の兵士たちが見た戦場の敵兵の姿はどのようなものであっただろうか。彼らは戦争以前から敵国に関する知識や情報を多少なりとも得ていて、さまざまなイメージを抱いていたと見られる。戦闘や捕虜の収容などで実際に日本とロシアの兵士を目の当たりにして、それらに変化が起こった可能性がある。

20 世紀初頭では、それ以前よりも、急速に発達した雑誌や新聞などが外国に対するイメージを含めた「集団意識」の形成に果たす意義や影響力は大きくなったと考えられる。日露の大衆雑誌が報じた両国の政治、外交、軍事、文化、思想など様々なジャンルの報道から、その読者である両国の知識人や大衆が持つ相手国に対する「集団意識」の一部が見えてくるのではないか。戦争のような多くの人々の私生活に容赦なく入り込む事象の場合、事象がイメージに及ぼす影響ははるかに大きい。[6]

これまでの日露戦争期のマスメディア研究やロシアの対日イメージの研究 [7] では、当時の日本の新聞の報道や論説記事にみる日本の対露認識や、[8] 大衆雑誌・風刺雑誌の挿絵や

年月日の前に「露暦」と付す。なお 1900 年から 1999 年の 100 年間のユリウス暦と現在一般的に用いられているグレゴリオ暦（太陽暦、新暦）の誤差は 13 日で、ユリウス暦の 12 月 19 日から 12 月 31 日は翌年の 1 月にあたる。また『ニーヴァ』の記事は、1918 年以前に採用されていたロシア語旧正書法に基づく記号や文字、綴りで表記された。本論文で『ニーヴァ』の記事を引用する際、記号や文字は現代のロシア語正書法にしたがって改めたが、綴りは原文のまま掲載する。また本論文で引用する『ニーヴァ』の記事の日本語訳はすべて筆者による。

[5] *Чхартишвили Г.* Образ Японца в русской литературе. // Знамя. 1996. №9. С. 188.

[6] Harold R. Isaacs, *Image of Asia: American Views of China and India* (New York: Capricorn Books, 1962), p. 405; H.R.アイザックス（小浪充、國弘正雄訳）『中国のイメージ』サイマル双書、1970 年、12 頁。

[7] 日露戦争期のロシア人から見た日本や日本人のイメージに言及した先行研究として、歴史学の分野では以下が挙げられる。Jean-Pierre Lehmann, *The Image of Japan: From Feudal Isolation to World Power, 1850-1905* (London: George Allen & Unwin, 1978); *Молодяков В. Э.* Образ Японии в Европе и России второй половины XIX — начала XX века. М., Институт Востоковедения РАН. 1996.

[8] 日露戦争期の東京で発行されていた日本の代表的な新聞を網羅し、当時の日本における外国認識に言及した重要な研究に、片山慶隆『日露戦争と新聞：「世界の中の日本」をどう論じたか』講談社選書メチエ、2009 年がある。

木版画にみる敵としての日本の視覚的イメージ、[9] ロシアの文学作品に描かれたステレオタイプ的な日本人のイメージが明らかにされてきた。[10]

しかしその多くが日露戦争期に新聞に並ぶ重要なメディアであった雑誌を等閑視しており、ロシアの大衆雑誌・風刺雑誌が取り上げられた場合であっても、分析の対象となったのはもっぱら挿絵や木版画の視覚的イメージである。雑誌の挿絵や写真などの視覚的イメージが掲載記事に表れる対日・対露イメージにいかに呼応しているかを探るためには、両者を切り離さずに扱うことが求められるだろう。そしてステレオタイプや敵としての対日・対露イメージの特徴は数多く示されてきたが、日本の対露イメージに関する研究は、ロシアの対日イメージに比べるとまだ発展途上にあるうえ、戦争の進展に伴うイメージの変遷の有無はほとんど検討されていない。したがって日露戦争期の雑誌に掲載された記事と挿絵、写真を総合的に分析し、対日・対露イメージの特徴の変化を考察することは、研究の余地が残された重要な課題であると考えられる。

1. 20 世紀初頭の日露を代表する雑誌：『太陽』と『ニーヴァ』

本論で扱う近代日本の月刊総合雑誌『太陽』と帝政末期のロシアの週刊絵入り雑誌『ニーヴァ』は、刊行形態や特徴は異なるものの、ともに知識人のほか都市・地方の中間層に代表される大衆を読者として獲得し、20 世紀初頭に人気を博した。

『太陽』は、1895（明治 28）年 1 月から 1928（昭和 3）年 2 月まで博文館から発行された近代日本を代表する月刊総合雑誌である。[11] 毎号、およそ 200‐280 頁程度の頁数で、当初は 1 冊 15 銭、物価上昇とともに価格が上がったが、1901（明治 34）年から 1916（大正 5）年 2 月までは 1 冊 30 銭を保ちつづけた。[12] 政治や経済、社会、風俗、科学、文学、芸術、文化など多岐にわたる分野の記事 が掲載された。論説記事が雑誌の大半を占める一方、短い通信やコラムのほか、文芸欄、国内外の新聞雑誌の抄録、口絵や写真、外国雑誌から

---

[9] 日露戦争期のロシアの大衆雑誌や新聞、地方向けのロシアの民衆版画（ルボーク, лубок）、風刺雑誌などのイラストにみる視覚的な日本のイメージを取り上げた先行研究に以下がある。Yulia Mikhailova, “Laughter in Russo-Japanese Relations: Comic Pictures of the Russo-Japanese War” *Asian Cultural Studies*: *International Christian University Publications 3-a.* (Tokyo: International Christian University, 2001), vol.27, pp.59-76; Yulia Mikhailova and M. William Steele eds., *Japan and Russia: Three Centuries of Mutual Images* (London: Global Oriental. 2008).

[10] *Чхартишвили.* Образ Японца в русской литературе. С. 188-200. 沼野恭子『夢のありか：「未来の後」のロシア文学』作品社、2007 年、128–161 頁。

[11] 第 2–5 巻を発行した 1896（明治 29）年から（明治 32）年までは月 2 回発行された。通常号のほかに年 2–4 回増刊号が発行された。鈴木正節『博文館『太陽』の研究』アジア経済研究所、1979 年、4 頁。

[12] 鈴木『博文館『太陽』の研究』、4 頁。1916 年 3 月以降、さらに価格は上昇しつづけ、1924（大正 13）年には 1 冊 80 銭に達している。

転載された風刺画も多数見られ、記事の種類は多彩であった。『太陽』の発行部数は、各巻最終号の広告欄に記された読者数や発行部数を調査した先行研究によると、正確なところは不明であるが、創刊から大正初期までは 10–30 万部程度の間で推移し、大正中期以降から昭和初期までは 1 万部近くになっていた。[13]『太陽』は決して安価な雑誌ではなかったものの、明治期および大正初期の日本においては圧倒的な発行部数を誇る人気誌であったと認められよう。

鈴木貞美は、総合雑誌としての『太陽』の特徴とその読者層について、欧米の“general magazine”との違いに触れながら以下のように論じている。

> “general magazine”は読者の関心をひくトピックスをいかに選ぶかを工夫する。そうした編集姿勢が成り立つのは、国民の“general”な教養基盤が成立しているからだ。その中心的な担い手は中産階級であり、また一定の教養を身につけた労働者階級の知的部分である。『太陽』は欧米の“general magazine”よりも、はるかに学術的であり、啓蒙的ないしは教育的色彩が強い。むしろ、これからの国民に期待される“general”な教養基盤を創り出そうとする点に特色をもつ「総合雑誌」だったというべきではないか。［中略］政治論などの記事の程度としては、中学生ないしは中学に行けない向学心のある若者、そしてそれと同程度以上のリテラシーをもつ階層、すなわち自営業主、各種の管理職、官吏や教員などが想定されていると見てよい。［中略］ただし、自営業主、各種の管理職、官吏や教員らの、いわゆる新中間層の層としての形成は、これからの時代と見るべきだろう。「日清戦争」後、中学生や高校生が増大する時代、民衆一般の知的向上の意欲が高まる時代を、『太陽』は、やや先取りし、かつ、それに答える誌面を作りだしていたのである。[14]

『太陽』は、欧米の“general magazine”に比べると、より学術的、啓蒙的、教育的な傾向にあった。それは、明治中期以降、旧制中学程度以上のリテラシーや教養を備えた中産階級や知的な労働者階級―― その主たる読者として毎月一定以上の収入を得ている男性が想定されていることは留意すべきだろう―― の形成を意識し、「国民の“general”な教養基盤」の創出に積極的に寄与するための方針だったのである。

一方の『ニーヴァ』は、1869 年末から 1918 年 9 月まで発行された帝政末期のロシアを

---

[13] 鈴木『博文館『太陽』の研究』、4–5 頁。鈴木が同頁で指摘するとおり、宣伝用の誇張が多分にある可能性を見ておく必要がある。
[14] 鈴木貞美「明治期『太陽』の沿革、および位置」、鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、2001 年、16–17 頁。

代表する週刊絵入り雑誌として知られる。発行元は、サンクトペテルブルクで活躍したシュテッティン出身のドイツ系出版企業家アドルフ・フョードロヴィチ・マルクス（Адольф Фёдорович Маркс, 1838–1904）が創業したマルクス社である。[15] 創刊当初は毎号 15 頁前後、挿絵の掲載は題字を含めて 3、4 点であったが、印刷技術の向上や読者の増加などに伴って論説記事や通信記事、挿絵、写真が増え、日露戦争勃発時の 1904 年には毎号 40 頁前後、挿絵は 20 点近くを掲載するようになった。『ニーヴァ』は比較的廉価だったこともあり（年間購読料は当初 4 ルーブリ、1898 年以降は 5 ルーブリ 50 コペイカ）、他誌を圧倒して売り上げを伸ばした。[16] 1873 年に 9000 部であったその発行部数は、[17] 1904 年に 27 万 5000 部を記録したのである。[18] 1900 年代に 20 万部以上を売り上げた人気誌であった点で、同時代の『太陽』と似た特徴を持っていたといえよう。

『ニーヴァ』のような帝政ロシアの絵入り雑誌の読者層について、巽由樹子は『ニーヴァ』の定期購読者のデータや帝政ロシアの公共図書館の利用者データの分析から、以下のように指摘している。民族の区別にかかわらず、19 世紀後半のロシアで識字率の向上に伴って「リテラシーを得た民衆」[19] や「軽い読書（リョフコエ・チチェニエ）」を楽しむ「いわゆる無教養な読者」[20]、「職人、召使、工場労働者ら下層民に属する読者は、もっぱら絵入り雑誌を好んだ」。[21] くわえて学術的書籍やインテリゲンツィヤが編集し、小説や文芸評論、社会評論を掲載した月刊の文芸雑誌「厚い雑誌（トルストゥイ・ジュルナル）」を好む「学生、教師、自由職、聖職者ら教養ある読者」、「商人・企業家、民間企業勤務者という中間層に官吏、軍人という国家勤務者を加えたかなりの読者」が「一定程度絵入り雑誌を利用した」。[22] つまり「絵入り雑誌は、全階層にわたる『軽い読書』のメディアだった」[23] のである。

しかも「『軽い』読者たちは、［中略］必ずしも絵入り雑誌を漫然と読んでいたわけではなかった。それよりもむしろ貪欲に、世界についての知識の指南を求めていた節がある」[24]

---

[15] 19 世紀にロシア帝国に流入したドイツ系・ポーランド系の出版事業者やマルクスについては、巽由樹子『ツァーリと大衆：近代ロシアの読書の社会史』東京大学出版会、2019 年、26–34 頁。同書は、『ニーヴァ』などの帝政ロシアの絵入り雑誌の特徴や読者層、それが創出した新たな文化の諸相などを、ロシア語の資料や文献の丹念な調査と分析によって明らかにした日本語による重要な先行研究である。

[16] 巽『ツァーリと大衆』、36 頁。

[17] Нива: Иллюстрированный журналъ литературы, политики и современной жизни. 1873. №17. С. 272. 巽『ツァーリと大衆』、36 頁で言及されている。

[18] *Динерштейн Е.А.* «Фабрикант» читателей А.Ф. Маркс. М., 1986. С. 40.

[19] 巽『ツァーリと大衆』、57 頁。

[20] 巽『ツァーリと大衆』、59–60 頁。

[21] 巽『ツァーリと大衆』、68 頁。

[22] 巽『ツァーリと大衆』、68 頁。

[23] 巽『ツァーリと大衆』、68 頁。

[24] 巽『ツァーリと大衆』、69 頁。

という。「絵入り雑誌が知識の手頃な供給源となった」うえ、[25]「ナロードがインテリゲンツィヤに教え導かれるのとは異なり、自学自習によって知識を身につけた」[26] という点を考慮すると、先に言及した雑誌による「『国民の“general”な教養基盤』の創出」は、明治期の日本のみならず、帝政末期のロシアでも同時代的に展開されていたというべきである。[27] なお『ニーヴァ』の正式な誌名は、創刊時は Нива: Иллюстрированный журналъ семейнаго чтенія（『ニーヴァ：家庭向け読み物の絵入り雑誌』）、1872 年以降は Нива: Иллюстрированный журналъ литературы, политики и современной жизни（『ニーヴァ：文学と政治、現代生活の絵入り雑誌』）であった。上述の巽の指摘や、後者の副題が終刊近くまで続いたこと、[28] 各号の誌面構成を踏まえると、『ニーヴァ』は政治や社会、風俗、文学、文化、芸術などさまざまなジャンルの内容を扱う総合雑誌におおむね近い特徴を備えていたとみてよい。[29]

したがって『太陽』と『ニーヴァ』は、発行頻度や頁数、挿絵・写真の掲載点数、読者層に違いはあるものの、発行部数や雑誌の持つ特徴といった共通点に注目すれば、比較対象として検討する妥当性は認められるだろう。

2.「文明と野蛮」: 自己イメージと他者イメージ

それでは、『太陽』と『ニーヴァ』の誌面に表れた日露戦争期の言説や表象を比較して分析することで、両国の「交流」や理解の様相と変容の一端を考察していく。日露戦争が勃発した 1904（明治 37）年 2 月以降の両誌には、敵意が顕著に表れていることが分かる。

まず『太陽』の事例として、1904 年 3 月に発行された『太陽』10 巻 4 号の記事を見てみよう。同号では、前月に起こった日露の開戦と戦況の報道に多くの紙幅が割かれた。巻頭に掲げられた時事評論記事には、以下のように記されている。

> 夫れ露国は、宇内平和の攪乱者也。世界人道の破壊者也。人の領土を奪ひ、人の主権を犯かし、自ら居ること倨傲にして、国交常に譎詐を用ひ、欺瞞迫害至らざる無し。其兵の疆外に侵略するもの、亦暴戾悪虐を逞うして憚らず、恰かも野獣の如く然り。

---

[25] 巽『ツァーリと大衆』、70 頁。
[26] 巽『ツァーリと大衆』、71 頁。
[27] 欧米に遅れて 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、日露でほぼ同時に雑誌・新聞メディアが興隆したといえるが、その共通性や差異については、今後より詳細な比較研究が待たれる。
[28] 1917 年以降、副題は誌名から次第に削除されることが多くなり、終刊を迎えた 1918 年発行の誌名からは完全に消えている。
[29] ただし『太陽』の主要な読者層が比較的教養の高い男性であったため、『ニーヴァ』が積極的に扱ったような女性向けの最新のファッションやモード、エチケットなどを指南する記事は皆無であった点は、両者の大きな違いである。

無辜を屠り、妻女を辱がしめ、貨資を掠め、財物を盗み、無道兇悪、文明国の倶に歯するを恥づる所にして、又神人の共に憤る所也。其来つて満韓疆上を侵すや、武断横暴恣間にし、専ら威嚇翻弄を以て極東の隣邦に臨み、頑囂洞喝必らず其非を遂げずんばやまず。[30]

執筆者は、読者に強く否定的な印象を与える漢語を多用しつつ、世界の平和や人道を乱して破壊し、隣国を威嚇して凶悪な悪事や犯罪行為のかぎりを尽くす残虐な「野獣」のイメージを、敵国ロシアに与えていることが分かる。しかしながら執筆者はロシアやロシアの人々の実情を知らないまま、一方的な先入観に沿ってこのような評論を記していると推測され、このようなロシアのイメージの真偽は定かではない。

当時、『太陽』の編集主幹であったジャーナリスト・評論家の鳥谷部春汀（とやべしゅんてい）（1865–1908）は、同号の「人物月旦」のなかで、当時、太平洋艦隊司令長官・極東総督であったロシア帝国の海軍軍人・政治家エフゲーニー・イワーノヴィチ・アレクセーエフ（Евгений Иванович Алексеев, 1843–1917）を以下のように評した。「一体露国は空威張りの没分曉漢が多いやうであるが、其中でもアレキシーフなどは、先づ図抜けた馬鹿者に相違ない。其の容貌から見ても、茫漠として無感覚らしい間に、ドコとなく横着で御し難い野獣的性格が現はれて居る。」[31] 同号にアレクセーエフの肖像写真は掲載されていないが、おそらくこの軍人の写真を目にした鳥谷部の偏った主観、つまり敵国のロシアを揶揄し侮蔑しようとする態度に基づいて率直に記されたと推測される。鳥谷部は、「空威張り」、「物わかりの悪い男。物の道理を知らない男。わからずや」[32] を意味する「没分曉漢」、「図抜けた馬鹿者」、「茫漠として無感覚」「横着で御し難い」、そして「野獣的性格」のように、先の引用と同様、読者に対して明らかに否定的な印象をもたらす語を重ねて、当時のロシアの男性一般を論じた。

情報将校として知られた陸軍軍人の福島安正（1852–1919）による定型詩「征露の歌」が同号に掲載されており、凶暴な侵略者としてのロシアのイメージが鮮明に表れている。たとえば「世界に名高き日本国／皇統連綿大君の／仁義を以て建てし国／之れに反する敵国の／嘘偽を常として／咎なき家を焼き払ひ／逃るゝ婦女子を辱め／凶悪暴戻神人の／国は広きも荒野原／［後略］」[33] とある。欺瞞を表す語や、婦女子の陵辱、「暴戻」など先に引

---

[30]「〔◉時事評論〕〇日露戦争の大猷」『太陽』10 巻 4 号、1904 年、2 頁。以下、『太陽』からの引用は、原則として常用漢字（印刷標準字体）と歴史的仮名遣いで表記する。

[31]「〔◉人物月旦　鳥谷部春汀〕アレキシーフは何者ぞ」『太陽』10 巻 4 号、43 頁。

[32]「ぼつぶんぎょうーかん［ボツブンゲウ••【没分曉漢】］」JapanKnowledge Lib『日本国語大辞典』[https://japanknowledge-com.anywhere.lib.kyushu-u.ac.jp/lib/display/?lid=200203dff8d787ieNyL0] 2022 年 9 月 3 日閲覧。

[33]「征露の歌　陸軍少尉　福島安正」『太陽』10 巻 4 号、211 頁。

用した時事評論記事と重なる表現が見られる点は、当時の日本のメディアでこのようなロシアのイメージが一般的になっていた可能性を示唆するものである。そこに対比されるのは、天皇による統治が続き、人道的で道徳的であることを世界に誇る日本の自己イメージであった。

同号の他の記事でも、上記と同じような日露のイメージが展開されている。「吾が帝国、今や露の暴逆を圧倒せむとす。これ東洋の文明国が、西洋文明中に残滞する野蛮の分子を殲滅せむとするものに外ならず、文明を誇る欧洲には、スラヴと称する狂暴の民族あり。」[34] 日本を「東洋の文明国」に位置づけ、西洋文明を守護する帝国として自己認識していることが認められる。そしてロシアを西洋文明のなかにある野蛮で、狂暴な存在と見なしている点はこれまでに見た記事と共通する特徴であり、それは「文明国」によって打倒されてしかるべきであると捉えられていた。日露開戦時の『太陽』では、このような種々の言説を通して実際に対面したことのないロシアおよびその人々に対するネガティヴなイメージが強化され、広く流布していたと考えられる。

その一方で、同号に掲載された小説家・翻訳家・文芸評論家の内田魯庵（1868–1929）[35] の論説記事「露国の二大非戦説（上）」は、一見、主戦論が目立つ『太陽』の論調の多様性や柔軟性を示すものであり、注目に値する。同記事では、当時ロシア帝国領にあったポーランド出身のユダヤ系銀行家・企業家ヨハン・フォン・ブロッホ（Johann von Bloch, Jan Gotlib Bloch, Иван Станиславович Блиох, 1836–1902）が著した『将来の戦争とその経済的影響』Будущая война и её последствия（1898）が詳細に紹介され、「兵術上、経済上、政治上の各方面より将来の戦争の到底不能なるを詳説したるものなり」[36] と評価された。[37] 注目すべきは、魯庵がブロッホの「非戦説」を紹介するにあたって冒頭に記した以下の一文である。「[前略]国民の敵愾心今や高調に達し、舌を鼓して露国の不信不義を斥罵する時、徐かに忙中の一閑話を試みて我が国民の豺狼視する無道の国にも亦仁人君子の声あるを伝ふるは強ち無用ならざるべし。」[38] 魯庵は、日本国民が山犬や狼のように残酷で欲深く、不誠実であるとみなして敵視するロシアのなかにも、学識や人格に優れ、戦争に反対する

---

34 「〔◉文芸時評〕文明史上の日露戦争　長谷川天渓」『太陽』10 巻 4 号、158 頁。

35 内田魯庵は、友人であった作家・翻訳家・ロシア研究者の二葉亭四迷（1862／64–1909）との関係もあり、ロシア文学およびロシア問題に深い関心を寄せていた。魯庵のロシア文学翻訳の実態とその評価については、加藤百合『明治期露西亜文学翻訳論攷』東洋書店、2012 年，156–214 頁を参照。魯庵のロシア関係評論・随筆とその評価については、拙著『近代文学者たちのロシア——二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公』ミネルヴァ書房、2021 年、183–290 頁を参照。

36 魯庵生「露国の二大非戦説（上）」『太陽』10 巻 4 号、135 頁。

37 次号の『太陽』10 巻 5 号に魯庵生「露国の二大非戦説（下）」が掲載され、小説家レフ・ニコラーエヴィチ・トルストイ（Лев Николаевич Толстой, 1828-1910）の非戦説が紹介された。同記事の評価は、野村喬『内田魯庵傳』リブロポート、1994 年、330–331 頁を参照。

38 魯庵生「露国の二大非戦説（上）」『太陽』10 巻 4 号、134 頁。

人道的な思想や理論を説く知識人が存在することを知り、冷静な対露認識を持つことを読者に促したのである。

日露の開戦の直後にあたる露暦 1904 年 1 月 31 日に発行された『ニーヴァ』の一節には、ロシアと日本の外交関係の断絶と開戦を発表するロシア皇帝ニコライ二世の勅書が号外として掲載された。この勅書によると、ロシアからの返答の外交文書を待たずに一方的に日本が露日の外交関係を断絶して、日本が宣戦布告をせずに突然仁川沖でロシア軍の砲艦を撃沈し、奇襲攻撃を行ったため、ロシアは即座に日本の挑戦に対して武力を持って対応したという。[39] これに呼応するように、同号の記事では、文明国らしからぬ野蛮で卑劣な日本のイメージが前面に押し出される。以下の引用は、『ニーヴァ』の記者によると見られる無署名の論説記事の一部である。

> Маленькое азіатское государство, только несколько летъ тому назадъ выдвинувшееся въ ряды державъ, возымело смелость начать войну с Россіей. Кичась своей культурностью, заимствованной изъ западной Европы, Японія осталась азіасткой страной по предательскимъ действіям своей политики и стратегіи.[40]
> わずか数年前に列強の仲間入りをした、アジアの小国家はロシアと戦争を始めるという大胆なことを企んだ。日本は西欧から借用したその文化の水準を鼻にかけているが、政治や戦略で背信的行為をはたらいた点ではいまだアジアの国のままである。

書き手にとって前提となっているのは、文明的なヨーロッパの列強が政治的・軍事的背信行為を行うことはなく、そのような行動に出るのは未開なアジアの国であり、ロシアは当然前者に含まれるという認識である。そのうえで、日本はヨーロッパの文明や文化を取り入れ、日露戦争の数年前に列強に加わったと評価されるものの、やはり「西欧から借用したその文化の水準を鼻にかけるアジアの小国家」として蔑視された。そして日本が宣戦布告なしに仁川沖で奇襲攻撃を仕掛けたことを、ヨーロッパの列強にはあるまじき「背信行為」と断じて、日本はやはり未開なアジアにとどまっていると非難する。ヨーロッパの文明国を自認するロシアからすると、Японія нарушила основныя положенія международнаго права, общаго и обязательнаго для всехъ культурныхъ странъ. [41]「日本はすべての文明国にとって共通かつ遵守しなければならない国際法の原則を破った」と捉えら

---

[39] Нива. 1904. №5. С.92 а. 開戦直前の日露の外交交渉とその決裂については、以下を参照。Ian Nish, *The Origins of the Russo-Japanese War* (London: Longman. 1985), pp. 206-221.
[40] Нива. 1904. №5. С.92 б.
[41] Нива. 1904. №5. С.92 б.

れていたのである。

露暦 1904 年 2 月 14 日発行の『ニーヴァ』でも、по поводу предательства Японіи「日本の背信行為が原因で」、[42] предательское нападеніе Японіи「日本の背信的攻撃」、[43] Напав «аки тать въ нощи» на Россию「『夜盗のごとく』ロシアに襲いかかって」[44] など、日本の奇襲を卑劣な背信行為として批判する語句が繰り返された。以下の一節も開戦時の『ニーヴァ』の論調を象徴するものとして挙げられる。Японія затеяла очень опасную для нея игру. Россія в своемъ безмерномъ миролюбіи умеетъ презреть дерзость, умеетъ миловать, но умеетъ и карать за дерзости.[45]「日本は自らのために大変危険な陰謀を企んだ。きわめて平和を愛するロシアは、厚かましい振る舞いをものともしないことも、赦すこともできるが、それを厳しく罰することも可能だ。」この引用のように、『ニーヴァ』で日本の野蛮さや卑劣さ、危険性が糾弾される際には、やはりロシアを日本よりも上位に置いて日本を蔑視しつつ、ロシアの人道性や開明的な姿勢を強調する言説が同時に現れる傾向がある。

その 1 週間後の『ニーヴァ』に掲載された政治評論記事でも、日本の攻撃が以下のように非難された。Это уже прямо действія не культурнаго государства, а дикой азіасткой орды, не разбирающей средствъ для своего хищническаго набега.[46]「これはもはやまったく文明国の取る行動ではなく、凶暴な襲撃のためとあらば手段を選ばない野蛮なアジアの汗国の取る行動である。」орда［引用中の орды は орда の生格形――筆者］とは、13 世紀初頭にモンゴル帝国を建設したチンギス・ハーンの子孫たちが作った汗国を意味する。[47] この言葉は転じて、中世のロシアを侵略した「タタール軍」という意味や、蔑みの意味を込めて「敵の大群」という意味も持つ。[48] ロシアにとって 1904 年の日本の攻撃は、13 世紀以降のモンゴルの侵入とその後 2 世紀にわたる「タタールのくびき」という恐怖と憎悪の記憶と重なって見えたと推測される。

開戦後の『ニーヴァ』では、文明のヨーロッパと野蛮のアジアという構図のほかに、白色人種と黄色人種の対立に落とし込んで記述される箇所も少なくない。Россія возстала, какъ одинъ человекъ, и, по веленію Царя, пойдетъ за тысячи верстъ, въ морозъ и стужу, пойдетъ безстрашно на врага, — врага, опаснаго для всей Европы, для всей белой расы.[49]「ロ

---

[42] Нива. 1904. №7. С.140.
[43] Нива. 1904. №7. С.140.
[44] Нива. 1904. №7. С.140.
[45] Нива. 1904. №7. С.140.
[46] Нива. 1904. №8. С.159.
[47] 東郷正延、染谷茂、礒谷孝、石山正三編『研究社露和辞典』研究社、1988 年、1318 頁。
[48] 東郷ほか編『研究社露和辞典』、1318 頁。
[49] Нива. 1904. №5. С. 92 б.

シアは一致団結して立ち上がった。そしてツァーリの命じるところにより、はるか遠くへ、厳寒酷寒にひるむことなく敵に、つまり全ヨーロッパにとって、すべての白色人種にとって危険な敵に立ち向かうのである。」日本はロシアに対して戦争を仕掛けたロシアの敵であるのみならず、ヨーロッパ全土や白色人種全体にとっての「危険な敵」とみなされていた。ここには記されていないが、日本はヨーロッパや白色人種に対置される存在としてのアジアの黄色人種に分類されることは明白である。一方のロシアは、ヨーロッパと白色人種を代表して、それらを脅かす「危険な敵」に立ち向かう国家として位置づけられたといえよう。

露暦 1904 年 4 月 31 日発行の『ニーヴァ』にも上記と類似の内容ながら、より踏み込んだ記述が見られる。«Грозная борьба, разгоревшаяся на Дальнемъ Востоке, где Россіи суждено защищать грудью европейскіе народы и ихъ цивилизацію отъ натиска полуварварской, загадочной и чуждой Азіи [...]»[50]「極東で燃え上がる危急存亡の戦い。そこでロシアはヨーロッパの民衆と文明を半ば野蛮で得体の知れない異国であるアジアの攻撃から身を挺して守ることを運命づけられている。［後略］」日本は野蛮で得体の知れないアジアの異国として描かれる一方、ロシアを野蛮なアジアからヨーロッパの民衆と文明を守るべき存在として自己認識していた。ここに文明のヨーロッパと野蛮のアジアの対立の構図が見られ、ロシアは前者に属すると捉えられていたことがうかがえる。このように開戦後の『ニーヴァ』の記事には、日本に対する敵意と蔑視が鮮明に表れており、西洋と東洋、ヨーロッパとアジア、白色人種と黄色人種という地理的・人種的な区分に基づき、ロシアと日本を認識していた点はきわめて特徴的である。

ここで日露開戦後の『太陽』の記事と『ニーヴァ』の記事を比較してみると、興味深い点が浮かび上がる。日露双方ともが、自らを西欧文明を代表する人道的な文明国であり、現下の戦争において西欧の文明と人道の守護神たることを自認する一方、相手国を世界の平和を乱し、隣国を威嚇して悪事をはたらく凶暴かつ残虐で野蛮な国家とイメージし、それを強固にする言説を流布していた。このような 20 世紀初頭の日露両国における自己イメージと敵国イメージの相似は、今後、両国の対露認識や対日認識、相互イメージを検討するうえで、より一層重要視されてしかるべきものである。

なお、『太陽』の各記事で展開された凶暴で野蛮な野獣的存在としてのロシア・イメージの形成には、日露開戦後、欧米の雑誌や新聞から『太陽』に転載された風刺画の影響が少なくないと考えられる。

---

[50] Нива. 1904. №14. С. 267.

たとえば［図 1］は、アメリカの「ニユース」[51] という雑誌から 1904 年 3 月発行の『太陽』10 巻 4 号に転載された風刺画である。大きなチェスボードをはさんで向かい合う日本とロシア。日本はヨーロッパ式の軍服を身にまとい、サーベルを腰から下げ、口ひげをたくわえた小柄な男性になぞらえられているのに対し、ロシアはシルクハットを斜めにかぶって口を大きく開けた巨大なクマ――伝統的にロシアを象徴する動物である――として描かれている。両者のチェスゲームを横から眺めるのは、おそらくイギリスとフランスを描いた正装のヨーロッパ人男性 2 名である。イギリスとフランスは開明的なヨーロッパ人、日本はヨーロッパの文明や技術、文化を全面的に受け入れた人間として描かれた。その一方で、ロシアは、斜めにかぶったシルクハットに象徴されるように、紳士的なヨーロッパの文明の一部を表面的に受容したため、真にヨーロッパ的な文明国ではないとみなされ、さらにはクマのように強大で野蛮、凶暴な未開の野獣に近い存在として、当時のアメリカの雑誌やマスメディアでイメージされていたことがうかがわれる。

図 1　『太陽』10 巻 4 号、1904 年、219 頁

［図 2］は、フランスの「デトロー」[52]という雑誌から 1904 年 5 月発行の『太陽』10 巻 7 号に転載された風刺画である。日本が開戦後、仁川沖や旅順口でロシアから戦果をあげたことを踏まえ、その巧みな戦術を仰向けに寝て足を使って行う日本の伝統的な曲芸になぞらえて描かれた。和傘と扇子を手に、着物と足袋を身につけ、口ひげをたくわえた男性が「日本」と書かれたベッドに仰向けになり、両足でロシアを象徴する巨大なクマを水車のようにぐるぐると回して半ば気絶させている。欧米列強を象徴する男性 6 名が塀の向こう側からその様子をのぞき見ている。ここでもロシアは巨大なクマとして描かれており、その両脚には鋭い爪が見えることからも、凶暴や野蛮のイメージが強く表れているといえるだろう。

つまり、先述の『ニーヴァ』の記事の分析で見たようなロシアの「人道的で文明的な欧米列強を代表する国家」という自己イメージは、当時の欧米列強の社会のなかでは共有さ

[51] この原誌を特定することができなかったため、その調査は今後の課題としたい。
[52] この原誌を特定することができなかったため、その調査は今後の課題としたい。

図 2　『太陽』10 巻 7 号、1904 年、218 頁

れていなかった可能性があると見てよい。これと表裏一体であると見られるのが、管見のかぎりでは『ニーヴァ』にロシアを巨大なクマとして描いた風刺画の掲載や転載は見られない点である。野蛮性や凶暴さ、未開であることを象徴するこのようなイメージは、明らかに当時のロシアの自己認識と相容れないものであった。欧米各国で流布したロシアの否定的なイメージは、ロシア国内では当然決して受け入れられるものではなかったことがうかがわれる。それに対して、強大で野蛮、凶暴な未開の野獣としてのロシアのイメージと、ヨーロッパ文明を受容しつつ、伝統と人道、道徳、仁義を世界に誇る日本の自己イメージは、欧米列強の社会である程度共有されていたといえるだろう。そしてそれらは各国のマスメディアで再生産され、日本の雑誌によって日本国内でも広まり定着していったと考えられる。

3. イメージと実像のあいだで：戦争進展期の両誌面の特徴とその変化

日露戦争の進展に伴い、戦況や戦場にいる将校や兵士たちの様子、日露両国内の社会や生活、風俗などが『太陽』『ニーヴァ』の双方で紹介、解説されるようになる。開戦直前まで両国に関する報道や情報はさほど多くなかったといえるが、開戦後、両誌に数多くの記事や挿絵、写真が掲載されることで、それらが前線から遠く離れた国内で雑誌を購読する読者に伝えられた。特に読者が、戦場や敵国の社会、生活を活写した挿絵や写真を通して、前章で検討したような雑誌の記者や寄稿者たちの言説が形成した敵国のイメージとは異なる実態や実情を知るようになった点は、なお一層留意されるべきである。

日露の開戦後、『太陽』では毎号で戦況の報道に多くの紙幅が割かれるようになったほか、ロシア文学作品の翻訳やロシア国内の諸事情を紹介する記事が見られるようになる。また巻頭の戦況に関する通信記事には、日露の将校や戦艦の写真・挿絵、日露国内の社会や生活、戦場の日露両軍の様子を撮影した写真が、毎号多くの頁に掲載されるようになった。当時、速報性の面ですでに雑誌をしのいでいた新聞に対抗するために、『太陽』が掲載する写真図版の数や画質、大きさなどを向上させたことは必然的であったと考えられる。

そのなかでも 1904 年 6 月発行の『太陽』10 巻 8 号の戦況通信記事に、ロシア軍やロシア国内の様子を撮影した写真 2 枚と挿絵 3 枚が掲載されたことは注目に値する。同号の戦

況通信記事ではすべての頁に 1 枚ずつ写真や挿絵が掲載されており、さながら絵入り雑誌のような構成であるが、通信記事の内容と写真・挿絵の内容がまったく無関係である点が大きな特徴である。管見のかぎりにおいては、これは『太陽』に掲載された写真や挿絵の多くに当てはまると考えられる。推測の域を出ないが、『太陽』購読者のなかには同誌の写真・挿絵を写真集や画集として眺めて楽しんだ者――たとえば購読者の家族など――が存在した可能性がある。ここでは『太陽』10 巻 8 号の戦況通信記事に掲載されたロシア軍およびロシア国内の様子を写した写真 2 枚と挿絵 2 枚に言及しておきたい。

図 3　『太陽』10 巻 8 号、1904 年、24 頁

図 4　『太陽』10 巻 8 号、1904 年、25 頁

［図 3］は、ロシアの皇族・貴族階級の女性たちの戦争への協力を撮影した写真で、ヨーロッパの雑誌などから転載されたものと見られる。ロシア皇族のマリア・パヴロヴナ大公夫人（Великая княгиня Мария Павловна, 1854–1920）が貴族階級の女性たちと出征するロシア軍の兵士たちの服を縫っている。豪奢なシャンデリアが吊り下げられた広間に集う貴族の女性たちが一心に作業する姿は、ロシア帝国の上流階級の贅沢な生活の様子を示す一方で、たとえ異国であっても戦時の女性たちの置かれた状況に日本社会との大きな違いはないことを感じさせる。［図 4］は、ロシア軍の隊列が首都サンクトペテルブルクを出発する様子をとらえた写真である。軍人たちは分厚い外套や冬用の軍帽、軍用ブーツを身につけ、太鼓や楽器を演奏しながら凍てつく大通りを行進している。その光景は、軍人たちの風貌や服装などは異なるものの、日本軍の出征と同様のものである。いずれの写真もロシア国内の社会の実態を写したものであり、被写体こそ皇族や貴族、軍人たちであるが、読者は現実のロシアの人々の生

活を見てとることができる。そこに先に検討した「巨大なクマ」のような未開かつ野蛮で凶暴なロシア人のイメージは立ち現れず、ただ同時代の日本社会にも通じる戦時の社会の実態が写されているに過ぎない。

［図 5］と［図 6］は、満洲の戦場でのロシア軍の挿絵で、前者には食糧運搬の様子が、後者には馬を駆るコサック兵たちが満洲の村落を襲撃する様子が描かれている。［図 5］では満洲の雪原を将校や兵士、荷役たちが馬や荷車を用いながら、食糧が入っていると見られる木箱や布袋などを運んでいるが、右側手前の将校が運搬の隊列から目を離して腰を下ろしているなど、戦闘の合間であるのか、全体的に多少くつろいだ雰囲気が漂っている。彼らの外見や表情などから開戦後の『太陽』で盛んに唱えられた残虐で野蛮なロシア人のイメージを読み取ることはできないだろう。［図 4］と同様に、日本軍とさほど変わらないロシアの軍の戦場での生活の一こまが切り取られて提示されている。［図 6］は画面奥から手前に向かってコサック兵の乗った馬数頭が駆けてくる構図となっている。大胆に躍動する馬やコサック兵の姿勢と相まって、見る者に臨場感をもたらし、疾走の迫力やコサックの勇猛さを感じさせる効果がある。当時の日本の読書界では、異国趣味をかき立てるロシアの象徴のひとつとしてコサックがしばしば紹介されたが、これもそのような読者の関心に応える写真であったと見られる。一方で、図の下に「満洲に於けるコサツク兵の暴行 Cossaks in Machuria.」というキャプションが付されているため、日本の読者にはこれが満洲の住民を巻き込んだ卑劣な襲撃であることを暗示させる。英語のキャプションにはない「暴行」というわずか二文字の語が、実際に描かれた対象よりも、ロシア軍の一員として戦うコサック兵の野蛮さや凶暴性をことさらに強調したのではないだろうか。このようなキャプションが『太陽』の読者の対露認識に与える影響は考慮する必要があるものの、以上

図 5　『太陽』10 巻 8 号、1904 年、26 頁

図 6　『太陽』10 巻 8 号、1904 年、28 頁

の挿絵 2 点のような図版は、読者がより臨場感をもってロシア軍の実像や実態を知るための手がかりになったと考えられる。

図 7　Нива. 1904. №9. С. 171.

日露の戦争が進行するなか、『ニーヴァ』の記事や挿絵、写真には、『太陽』に比べると日本軍の野蛮で卑劣、かつ残虐なイメージがより多く鮮明に表れている。[図 7]は、露暦 1904 年 2 月 28 日発行の『ニーヴァ』に掲載された挿絵「韓国にて。ソウルで路面電車を占領する日本兵たち」である。[53]韓国の住民たちを押しのけて、日本兵たちが次々と路面電車に乗り込んでいく。住民たちは日本兵たちに阻まれて、電車に乗ることができない。近くにいる日本兵に嘲笑された住民の一人である男性が両腕を大きく広げて憤っている様子が描かれている。この住民を嘲る日本人男性は、卑劣で狡猾な笑みを浮かべており、その表情は、開戦後の『ニーヴァ』で伝えられた日本人の否定的なイメージを象徴するかのようである。

［図 8］は、露暦 1904 年 5 月 8 日発行の『ニーヴァ』に掲載された挿絵である。同誌従軍特派員でイラストレーターや報道カメラマン、作家、商業用ポスターの製作家としても活動した画家のタブリン（Владимир Амосович Табурин, 1864–1919）が描いた素描に基づく挿絵で、一頁全体に掲載された大判のものであった。挿絵の下には、「瓦房店近郊を走る、赤十字社の旗が立つ傷病者輸送車が連結された旅客列車を目がけて日本兵たちが射撃する」というキャプションが付されている。[54] 瓦房店は中国の大連からおよそ 100 キロに位置する。広々とした荒野のなかを、蒸気機関車が煙を上げながら走りゆく。先頭車両には白地に赤の十字が描かれた赤十字社の旗が立てられている。負傷した、あるいは病気にかかったロシア兵たちが野戦病院へ運ばれていたと見られる。その列車に対して日本兵たちが一斉に銃を構える。この挿絵とキャプションを目にした読者は、その光景の後に起こる惨劇を想像したことだろう。抵抗できない傷病兵たちのいる列車をめがけて容赦なく銃口を向ける日本兵たちの非人道性や

[53] Нива. 1904. №9. С. 171.
[54] Нива. 1904. №19. С. 373.

Обстрѣливаніе японской пѣхотой пассажирскаго поѣзда съ санитарными вагонами подъ флагомъ Краснаго Креста близъ ст. Вафандянъ.
По наброску нашего спеціальнаго корреспондента В. А. Гаврина, переданному нашъ телеграммой, рисовалъ А. Чикинъ.

図 8　Нива. 1904. №9. С. 171.

残虐さを伝える一枚である。

そのような日本兵の態度は、露暦 1904 年 7 月 3 日発行の『ニーヴァ』に掲載された政治評論記事でも描写されている。

> Чудовищные факты добиванія русскихъ раненыхъ, жестокихъ издевательствъ надъ умирающими, уродованіе труповъ, которыхъ находили съ выколотыми глазами, съ отрезанными ушами и носами, засвидетельствованы не только целымъ рядомъ корреспондентскихъ телеграммъ, но также и официальными протоколами, скрепленными подписями находящихся при русской арміи военныхъ агентовъ иностранныхъ державъ, рыцарскимъ заявленіемъ принца Хаиме Бурбонскаго и, наконецъ, даже фотографическими снимками.[55]
>
> ロシアの負傷兵たちにとどめをさし、死んだ兵士たちに残忍で侮辱的な行為をはたらき、目をえぐり取り、耳や鼻を切り取って死体を損壊するというおぞましい事実は、通信員たちから届く一連の電報のみならず、ロシア軍に従軍している外国列強の戦時諜報員たちが作成した署名入りの公式記録や、ブルボン家ハイメ公の高潔で騎士道的な声明、そして遂には撮影された写真までもが、それが相違ないことを証明している。

日本軍の残虐な行為の様子がきわめて生々しく具体的に描かれ、欧米列強が取材した数々の記録や写真などによってその裏付けもされていると論じられた。

このような残忍かつ冷酷な日本軍のイメージは、報道写真によってより迫真性を持って伝えられることになる。露暦 1905 年 1 月 22 日発行の『ニーヴァ』に掲載された「20 世紀の残虐行為」[56] というルポルタージュ記事では、2 枚の写真（[図 9]［図 10]）とともに韓国の住民に対する日本兵の残虐行為が糾弾された。日本兵たちが 3 名の若い男性たちを

[55] Нива. 1904. №27. С. 536-537.
[56] Нива. 1905. №3. С. 51.

磔にし、50–60 メートル離れた所から射殺したという。[57]［図 9］には、白い装束を着せられた 3 名の男性たちが、野原に立てられた十字架に掛けられている様子が遠目に写っている。［図 10］はより近距離から撮影され、男性たちは目隠しをされていたことが分かる。彼らはすでに殺されており、白い装束の一部が血に染まっている。日本兵が命中した弾丸の数を数えるために、遺体に近寄っている。記事の言葉を引用すれば、«Высоко-культурные» японцы [58]「きわめて文明的な日本人たち」が罪のない韓国の住民を銃殺するという行為に及ぶ。そこに繰り広げられる光景は、まさに Жутко писать эти чудовищнныя слова! [59]「これらのむごたらしい言葉を書くことはおぞましい！」ものであった。ここにも「文明国の国民でありながら、野蛮で残虐な行為を行う日本人」の実像が映し出されている。このようにして、野蛮で残虐な日本兵たちは、想像や先入観に基づくイメージを越えて、現実に存在するものとして『ニーヴァ』の読者の前に立ち現れたのである。

Звѣрства XX столѣтія. Японцы разстрѣливаютъ корейцевъ, предварительно распятыхъ на крестахъ и представляющихъ собою живыя мишени. Приготовленіе къ стрѣльбѣ.
По фот. изд. «Нивы».

図 9　Нива. 1905. №3. С. 51.

Звѣрства XX столѣтія. Японцы разстрѣливаютъ корейцевъ, предварительно распятыхъ на крестахъ и представляющихъ собою живыя мишени. Осмотръ убитыхъ для опредѣленія счета попавшихъ въ нихъ пуль. По фот. изд. «Нивы».

図 10　Нива. 1905. №3. С. 51.

日露戦争中の『ニーヴァ』では、『太陽』と比較すると、野蛮で残虐の日本兵の実態がより明確に表れていたことを確認した。それと同時に、同誌には日本軍の巧みな戦術を高く評価したり、詳細に描写したりする記事や挿絵が見られる。1904 年 7 月 10 日発行の『ニーヴァ』に掲載された論説記事「戦争の反響」では、日本軍について Японцы удивительно изобретательны на всякіе военные фокусы.[60]「日本人たちはあらゆる戦争の策略において驚くほど機知に富んでいる」と評された。さらに日本兵たちの機転の利いた知恵と器用さに

[57] Нива. 1905. №3. С. 51.
[58] Нива. 1905. №3. С. 51.
[59] Нива. 1905. №3. С. 51.
[60] Нива. 1904. №28. С. 552.

図 11　Нива. 1905. №10. C. 197.

ついて、「最近の戦いでは、本物の砲兵中隊に見せかけた木製の大砲をたくさんこしらえた上、韓国のソウルに自国の大軍を置き、まるでオペラの小道具を出し入れするように自由自在に整然と動かしている。軍隊を夜は郊外に引き揚げ、昼はソウルに投入する」[61] と描写する。露暦 1905 年 3 月 12 日発行の『ニーヴァ』に掲載された一頁を占める先述の画家タブリンの挿絵「プチロフ丘に向けて置かれた見せかけの日本軍砲兵中隊」[62]（[図 11]）も、そのような日本軍の戦術の一端を示すものであろう。大きな丸太を大砲に、鉄片を組み合わせたものを砲台や車輪に見立てて、偽物の大砲が作られている。傍らには兵士の軍服を着た案山子が 3 体立てられた。ロシア軍が日本の砲兵中隊だと思いこんだのか、激しい砲撃を加えたようで、至近距離で黒煙が立ちこめているの分かる。以上の記事や挿絵から明らかであるとおり、『ニーヴァ』では日本軍の戦術にも注目して、詳細に報じており、より多角的な報道や論説が展開されていたことがうかがわれる。

日露の開戦から半年以上経過した 1905 年 11 月以降、『太陽』と『ニーヴァ』の双方で両国の兵士や捕虜の交流に関する記事や挿絵、写真が見られるようになる。

たとえば 1904 年 12 月 1 日発行の『太陽』10 巻 16 号に掲載された象徴的な写真［図 12］は、とりわけ目をひく。左側に口ひげと顎ひげをたくわえた日本兵が、右側に口ひげのあるロシア兵がそれぞれ椅子に腰をかけている。二人とも左腕に赤十字のマークが付いた白い浴衣を身につけており、左側の日本兵が頭部と左手に包帯を巻いていることから、二人は負傷兵で日本側の病院に収容されたと推しはかられる。両者とも軍人らしく精悍な顔つきであるが、右側のロシア兵は草履を履いた両脚を交差させて崩して座っており、ゆったりとくつろいでいるように見える。この写真のキャプションには「小説よりも面白き実話の主人公」[63] とある。『太陽』巻頭の通信記事に収録された写真であるが、この写真の内

[61] Нива. 1904. №28. C. 552.
[62] Нива. 1905 г. №5. C. 99.
[63] 『太陽』10 巻 16 号、1904 年、28 頁。

容を解説する記事は見られず、写真が撮影されるまでにこの二人の間に起こった出来事を明らかにすることは難しい。推測の域を出ないが、両者が病院に収容される前に戦場で知り合っていてすでに何らかの交流があり、病院で偶然再会して個人的に友情を深めたものと考えられる。

小說よりも面白き實話の主人公

図 12　『太陽』10 巻 16 号、1904 年、28 頁

同号の『太陽』には、以下のような興味深いコラムも存在する。「六月十五日浦塩艦隊の暴行に遭ひて捕虜となりし和泉丸の一等運転士柳生甲子郎氏露国レヤザン市より一書を妻君に送りしが中に左の和歌あり［中略］花を贈られたるとき（敵国の人より）／しべりあの荒野の道は遠けれど／人の情はかはらざりけり［後略］」[64]。1904 年 6 月にすでにロシア軍の捕虜となってリャザンに収容された、輸送船の一等航海士が妻に宛てて送ったこの和歌には、ロシア人から受けた温かい人情に対する感慨が歌われている。和歌の前に付された記述を見るかぎり、詠み手の柳生氏は、おそらく捕虜になるまでにウラジオストクでロシア艦隊の暴行を受けたと見られる。しかし収容先でロシア人から思いがけなく花を贈られた詠み手は、心の温かさはロシアの人々にも等しくあり、そこに日露や敵味方の区別はないことを実感したのだろう。「しべりあの荒野の道は遠けれど」には、詠み手が収容所から解放されて日本に陸路で向かうシベリアの険しく果てしなく長い道のりとともに、敵対する日露両国の心理的な距離も読み取れる。詠み手はロシア人から贈られた花と受けた温情を胸に、日露の間に横たわる「しべりあの荒野」を踏破しようとするのである。

翌 1905 年 1 月発行の『太陽』11 巻 1 号には、日露両国の新聞記事を引用して解説した記事「露国の親日論」が掲載された。以下の一節には、ロシアの新聞における親日感情を伝える重要な記述が見られる。

---

[64] 『太陽』10 巻 16 号、1904 年、154 頁。

露国『ルス』新聞の言に曰く、『開戦の当時露国人は皆日本人を観るに浅薄なる眼光を以てせり、［中略］世間日本軍の残忍を説くものあるも、是れ悉く根拠なき浮説にして日本にある捕虜将卒の書簡は均しく日本人の懇切を説く、此の懇切は日本人が我旅順の艦隊に卑劣なる襲撃を加へし罪を償ふて余りありと謂うべし、今や日露両国が多数の人命を犠牲にするの事実は、却て互に相敬し相親しむの情を生ぜしむるに至れり、而も此の情や日々に益々増長せんとす、今や我等露人の日本に対する意見は全然一変せり。知るべし此犠牲によりて生ぜる黙契は、日露両国が将来大に親しむの基礎となることを』と、［後略］[65]

「露国『ルス』新聞」は、ジャーナリストや演劇評論家として活動し、帝政末期のサンクトペテルブルクで日刊紙『ノーヴォエ・ヴレーミャ（Новое Время）』を創刊した出版人スヴォーリン（Алексей Сергеевич Суворин, 1834–1912）が同じくサンクトペテルブルクで発行した日刊紙『ルーシ』Русь であると推定される。[66] この記事によると、開戦当時のロシア国内では日本人を侮って見ており、日本軍の残虐性が唱えられることがあったという。しかしそれは事実に反する根拠のない虚偽の話であったとし、日本で捕虜となった将校や兵卒たちが皆日本人が親切であることを書簡で知らせ、その親切さは 1904 年 2 月の日本軍の旅順港の奇襲攻撃の罪をしのぐものであると伝える。この引用では、日露両国は多くの人命を犠牲にした点で一致しており、互いに同情や親近感、敬意を抱き、その感情は日を追うごとにより高まっているということが強調された。それが将来の日露親善の基礎になるとも期待されており、戦時中にもかかわらずロシア国内の新聞で公にされたそのような論調が、開戦当初に明らかな反露感情やロシアに対する蔑視と敵意を押し出していた『太陽』で紹介された点は、誌面上の重大な変化であったと評価できるだろう。

一方、露暦 1904 年 11 月 13 日発行の『ニーヴァ』には、ロシア人兵と日本兵の交流が描かれた挿絵「旅順付近の最前線陣地にて　ロシア軍兵士が負傷した日本軍将校を抱えて、戦場から運び出している」[67] が掲載された（[図 13]）。ロシア軍兵士が日本軍の将校を抱えて、山の斜面を降りている。この将校は負傷して動けなくなったのか、ロシア兵の腕の中でぐったりとしている。日本人将校を抱えたロシア軍兵士が降りてくる様子を斜面の下で軍人たちが見ている。なかには驚いている者もいる。自軍の兵士が連れてきたのが、敵

---

[65] 「露国の親日論」『太陽』11 巻 1 号、1905 年、214–215 頁。ただし原文では「今や日露両国が［中略］となることを」」に白丸が付されている。

[66] 本論文の執筆時点では、『ルーシ』の原紙を調査することが叶わなかったため、この引用の出典となった元の記事の特定は今後の課題としたい。またこの引用が『太陽』の記者が『ルーシ』から直接翻訳し引用したのか、欧米の新聞などから転載したのかについても、現時点では不明である。

[67] Нива. 1904. №46. С. 916.

На передовыхъ позиціяхъ у Портъ-Артура. Русскій солдатъ выносетъ на рукахъ съ поля битвы раненаго японскаго офицера.
По наброску съ натуры Ф. Виллерса, рисунокъ Г. Конкина. Лит. «Нивы».

図 13　Нива. 1904. №46. С. 916.

軍の将校だと分かったからだろう。状況の許すかぎり、両国の兵士たちとも敵味方分け隔てなく傷病兵を救助しようとしていたことが見て取れる。『ニーヴァ』の読者に対して、ロシア兵の人道性や友愛を示すと同時に、負傷した日本人将校に対する同情の念を引き起こす。調査したかぎり、日露両軍の交流や救助を描いたこのような挿絵はそれ以前の『ニーヴァ』には見られない。

露暦 1905 年 4 月 23 日発行の『ニーヴァ』で注目すべきは、作家や軍事史家、ジャーナリストとしても活動したロシア軍近衛連隊長 Yu. エレツ（Юлий Лукьянович Елец, 1862–1932）が露暦 1904 年 10 月 14 日に奉天で執筆した戦場ルポルタージュ「捕虜の日本人と我が兵士たち」である。[68] この記事によると、ロシア軍宿営地における日本人捕虜の数が増えており、彼らとロシア兵の間でもちろん衝突はあったが、ロシア兵たちの中には騎士道的に日本人捕虜に接した者たちもいたといい、[69] エレツが戦闘中に取材したそのような出来事を複数挙げている。ここではその一部に触れておこう。

最近多数起こった騎兵隊の小競り合いのなかの一つで、テレク川・クバン川沿いのコサック兵が日本の竜騎兵を捕らえたのだが、殺すことなく捕虜としてロシア軍の宿営地に連れて行った。その後、このコサック兵は日本の竜騎兵に面会を申し出た。コサック兵は日本兵を一目見るなり、彼を抱きしめキスをし始めた。そして日本兵は通訳を介してコサック兵に以下のように伝えたという。

> «Не знаю, какъ отблагодарить тебя за то, что ты пощадилъ меня и отнялъ у меня жизнь. Въ нашей арміи много такихъ храбрыхъ, какъ ты, но такого рыцаря (самурайя) нетъ. Ты для меня теперь больше чемъ родной, и когда, Богъ дастъ, окончится война, я пріеду къ тебе посмотреть, какъ ты живешь, а потомъ возьму тебя въ Японию и отвезу въ мой домъ

[68] Нива. 1905. №16. С. 314, 317.
[69] Нива. 1905. №16. С. 314.

познакомить тебя съ моею семью и показать ей русскаго рыцаря, который спасъ мне жизнь».[70]

「君が私を赦し、私の命を助けてくれたことにどれほど感謝すればいいか分からない。我々の軍には大変勇敢な兵士はたくさんいるが、君のような高潔な騎士（サムライ）はいない。君は今や私にとって肉親以上である。だから戦争が終わるめぐり合わせになったら、私は君のところへその暮らしぶりを見に来よう。それから君を日本に連れて行って、私の家へ行き家族を紹介して、家族に私の命を救ってくれたロシアのサムライを見せたい。」

これも、ロシアのコサック兵の人道性や高潔さを表すとともに、日本兵の率直さや善良さ、両者の間に芽生えた友愛の精神を、『ニーヴァ』の読者に余すことなく伝える逸話であるといえる。

また足を骨折したロシア兵と同じく怪我を負った日本兵の交流も記されており、[71] 戦場で同じ立場となった日露両軍の兵士が言語を越えて友好的に交流した様子がきわめて好意的に描かれている。1904 年 10 月 3 日に中国東北部の沙河で戦闘が行われた夜明け頃、足を骨折したあるロシア兵が丘の斜面で倒れていたという。彼は数歩離れたところに自分と同じように怪我をして倒れている日本兵を見つけたので、手をあげた。日本兵も同じように手をあげたので、二人は四つんばいなって向き合った。どちらの兵士も相手が自分を撃ってくると思っていたのだった。どうしたらいいか分からず、長い間黙って見つめ合っていたが、ロシア兵は自分の銃を少し持ち上げて、だめだと首を横に振った。すると日本兵も彼と同じような動きをした。そして二人は安心して這い寄り、手を握り合った。それから互いに自分の傷を相手に見せた。担架を持って通り過ぎた衛生兵たちがこの光景に出くわした。その後日本兵は熱心にロシア兵の傷口に包帯を巻いたという。

その他の事例でも、ロシア軍の野戦病院や日本人捕虜を収容する宿営地で、ロシア兵たちと日本兵たちが会話し、食べ物や煙草を分け合いながら心を通わせあう様子が描かれる。この記事に出てくる日本兵たちはロシア兵たちの前で何度も善良そうに笑う。Японецъ радостно улыбается「日本人はうれしそうに微笑む」、[72] Японцы с блаженными физіономіями уписывали жирный супъ и что-то радостно гоготали.[73]「幸せそうな表情をした日本人たちは濃いスープをほおばって、何かうれしそうにからからと笑った。」ここにも開戦当時の『ニーヴァ』に現れた「野蛮で狡猾、強欲で恐ろしい日本人」のイメージは

[70] Нива. 1905. №16. С. 314.
[71] Нива. 1905. №16. С. 317.
[72] Нива. 1905. №16. С. 314.
[73] Нива. 1905. №16. С. 314.

まったく見られず、ロシア兵に対して無邪気ともいえるほど友好的で実直な態度を見せていたことがうかがわれる。

最後に、以上のように『ニーヴァ』で報じられた一連の日露両軍の友好的な交流を象徴するような出来事が描かれた挿絵に言及しておく。戦争終結が近づく露暦 1905 年 6 月 18 日発行の『ニーヴァ』に挿絵「東郷とロジェストヴェンスキー。佐世保の海軍病院にて」[74]（[図 14]）が掲載された。戦争後期の『ニーヴァ』では、日本の軍人たちは礼儀正しく善良な人物であるとしばしば報じられ、戦時中でも両軍の兵士たちが礼節をもって様々な形式で交流をしていたことが伝えられた。1905 年 5 月 27 日、28 日の日本海海戦でロシア軍は大敗を喫し、負傷し捕虜となったロシア兵たちの一部は長崎佐世保の海軍病院に運び込まれた。そのなかにバルト艦隊を率いていたロジェストヴェンスキー海軍中将（Зиновий Петрович Рожественский, 1848–1909）が含まれており、かなりの重傷だったため、付き切りで看護が行われた。[75] その間、日本軍連合艦隊司令長官であった東郷平八郎（1848–1934）が入院するロジェストヴェンスキーの見舞いに訪れている。『ニーヴァ』に掲載されたイラストは 2 人の面会の場面を描いたものである。頭に包帯を巻かれ、ベッドに横たわるロジェストヴェンスキーの傍らに大きな花束を持った東郷がいる。東郷は思いやりに満ちた穏やかな表情を浮かべ、ロジェストヴェンスキーに語りかけている。敵国の司令長官である東郷が負傷した自国の将軍に敬意を表して見舞いに訪れたことは、『ニーヴァ』の読者に対して日本の軍人の礼儀正しく善良なイメージを与え、戦時下で生まれた日露の友好を印象づけるような出来事として伝えられたといえるだろう。

図 14　Нива. 1905. №24. С. 478.

戦況の進展にしたがって、ロシア軍の将校や兵士たちは日本軍と交戦するなかで日本の将校や兵士たちの実像を知り、それは『ニーヴァ』の記事や挿絵などによって、戦場から

---

[74] Нива. 1905. №24. С. 478.
[75] 河合利修「日本赤十字社史料から見た日露戦争における日本赤十字社の救護活動」『日露戦争とポーツマス条約』山梨学院大学、2006 年、190 頁。

遠く離れた読者にも少なからず伝えられた。『ニーヴァ』と『太陽』を比較すると、もちろん発行形態や掲載される図版の枚数などの違いも影響していると考えられるが、『ニーヴァ』の方が日本の軍人の実像や日露両軍の友好的な交流をより多く充実して伝えた傾向があったと判断できる。戦争は継続しており、極東や満洲の各地で激戦が繰り広げられる最中ではあったが、これまで検討したように、両国の兵士たちが敵意を越えて交流や友好、好感を深める様子が『太陽』と『ニーヴァ』の両誌で取り上げられていた点は、日露戦争中の両国のマスメディアにおける報道や言説を総体的に検討するうえで注目すべき事実である。

おわりに

以上、本論文では 20 世紀初頭に多数の読者を集めて当時の日露の出版文化を代表し、多岐にわたる分野の記事や挿絵、写真が掲載されるなど総合雑誌の特徴を備えた雑誌『太陽』と『ニーヴァ』の日露戦争期における言説や表象を考察した。戦時になると、雑誌では交戦国にかかわる情報、論説、挿絵、写真が増え、戦場にいる兵士たちだけでなく、戦線から隔てられた雑誌の読者である知識人や大衆も交戦国への関心を高めたと見られる。そこで両誌におけるロシアや日本の報道、紹介を通じて、読者の日露双方に対するイメージや心理的・感情的な対露認識、対日認識が形成されていく過程を見てきた。

第一に、日露開戦時の両誌では多くの記事や挿絵、挿絵に日露双方に対する強い敵意と蔑視が明確に表れていた。両者に共通して見られたのは「未開で野蛮、卑劣かつ凶暴で残虐」というきわめて否定的な他者イメージであった。『太陽』では、欧米の雑誌から転載された風刺画に描かれた「恐ろしい巨大なクマ」に象徴される野蛮で残虐なロシアのイメージが論説記事や寄稿記事にも広く浸透していたといえる。これは実際にロシア人と交戦し交流した実体験に基づくものではなく、書き手の先入観や得られた数少ない情報に拠って形成されたものと見られる。それと表裏一体となって積極的に打ち出されていたのが、皇統や伝統を長らく守る一方で、西欧列強の文明や文化を摂取したアジアの人道的な文明国という日本の自己イメージであった。これは、欧米の雑誌から『太陽』に転載された風刺画における日本の表象を見ても、当時の欧米列強の各国でも一定程度受け入れられ、共有されたイメージであり、それが『太陽』で受容されてより強固な自己イメージとして定着したと考えられる。

一方の『ニーヴァ』では、『太陽』と同様に、交戦国の否定的なイメージが「文明対野蛮」の構図で論じられたほか、「白色人種対黄色人種」の人種差別や人種間対立の構図でも語られ、日本に対する敵意と蔑視が強調された。開戦からしばらく経過した後も、記者の論説記事や取材、寄稿者のルポルタージュ、戦場の挿絵や写真によって日本の卑劣な残虐行為が継続して写実的に報じられ、強く非難されたと評価できる。くわえて『ニーヴァ』

に見られたのは文明的・人道的な西欧列強を代表する存在であり、野蛮なアジアからヨーロッパの民衆と文明を守る国家というロシアの明確な自己イメージであった。しかし『太陽』転載の欧米の風刺画を見るかぎり、このようなロシアの自己イメージは、当時の欧米列強の社会のなかではほとんど共有されていなかったといえるだろう。20 世紀初頭の日露両国における自己イメージと敵国イメージが多くの点で類似していた点は、今後、両国の対露認識や対日認識、相互イメージを検討するうえできわめて重要である。

第二に、日露開戦から半年以上経過した 1905 年 11 月以降、『太陽』と『ニーヴァ』の双方で両国の兵士や捕虜の交流に関する記事や挿絵、写真が掲載されるようになったと判断できる。『太陽』ではそのような記事や挿絵、写真の数は決して多くはなかったが、本論文では巻頭の戦況通信に掲載された日露の負傷兵の写真と捕虜となった日本軍の輸送船の航海士の和歌を伝えたコラム、ロシアの日刊紙に掲載された親日論を紹介する解説記事を取り上げた。それらを通して、同誌に表れるようになった両国の兵士や捕虜の交流、ロシアへの親近感、戦後の日露の親善への期待の示唆が表れていたことを実証した。『ニーヴァ』では、『太陽』よりも圧倒的に多数の評論記事や通信記事、挿絵、写真で、両軍の兵士や捕虜の友好的な交流や日本の軍人たちへの好感が伝えられ、具体的な逸話にも事欠かない。本論文では言及できなかった記事や挿絵、写真が多数あり、その分析については他日を期したい。戦争後期の両誌において、交戦国への親近感や好意、友好の意が見られたのは、戦場での両軍の交戦や交流が日常となり、双方を先入観などに基づくイメージではなく、実像として把握し理解できるようになったことが大きな原因であったといえる。今回取り上げた事例は日露戦争という大きな犠牲を払った望ましくない軍事衝突であったものの、日露の直接的な接触や交流の増加が両国の理解や親善関係の発展の一助となったことには相違ないのである。

本論文では、日露戦争期の『太陽』と『ニーヴァ』という二誌のみ限った調査と比較分析から両国の相互イメージの特徴と変遷の一端を考察した。今後は、『太陽』を発行した博文館が日露戦争期に発行し、戦争報道や軍事情報、戦争プロパガンダにより傾いた画報誌『日露戦争実記』や、『ニーヴァ』以外の複数のロシアの絵入り雑誌も分析の対象とし、当時の日露の雑誌が伝えた両国の相互イメージや実像をより包括的に明らかにしたい。